

読売歌壇

小池 光選

県境を跨ぎ流るる冬ざれの「男」坂東太郎は寡黙
熊谷市 間中 昭

【評】坂東太郎はむろん利根川。筑紫一郎は筑後川、四国三郎は吉野川。冬枯れであつても川は「男」だ。堂々と流れてそして寡黙。こういう男も少なくなつたが。

カラカラと何度も振つて弟とハッパ探した伍入りドロップス
鶴ヶ島市 由井 意男

【評】誰でも食べたあの伍入りドロップス。伍入りは今ではあまり見なくなつたようである。振ると小さな口から出てくる。好みのドロップが出てきたときは嬉しかったな弟よ。

愛犬を四匹連れて鶴匠のこまくりードさききゆくひとのあり
埼玉県 横山喜美江

【評】しばしば見る風景。さながら鶴匠の「こま」とはよく言った。鶴の鳥を飼つたに、小さな犬を四匹も飼つてゐるのである。

めぐり来てわが掌にありぬたかたの満州国の
鶴角の銭
稲城市 山口 佳紀

亡き祖父の人柄探す本棚に武者小路実篤詩集
山陽小野田市 磯谷 祐三

父母の墓丁寧拭く三姉妹貧しき時を共に生きたり
川越市 大貫 芳江

胃の切除五年の歳月経過せりうれしき爆発電話しまくる
東村山市 伊藤美津子

「内地」から来たらしわねに札幌を「奥地」と
呼びし函館の人
江別市 海老沢 基

大寒はプラス八度と文字太く一行書きで日記を閉づる
青森市 安田 溪子

日本海灯台の灯の胸にしむ母在ればこそ故郷のあり
橋本市 若崎 喬子

栗木 京子選

巣ごもりの小鳥飛び立つきざしあり制服採寸終えしと聞きぬ
鳥取県 小谷真由美

【評】親鳥に守られていた雛鳥にも巣立ちの時がやって来た。入学が決まつて制服の準備をしているのだらう。「きざしあり」「制服採寸」に初々しいエネルギーが感じられる。

女の子たちと日曜はチョコ買いに行くよと笑う令和の少年
名古屋 山本 望

【評】バレンタインデーが近い頃の歌かな、と思う。女の子から一方的にチョコをもらうのではなく、いっしょに買いに行くのが現代風なのか。令和の少年は頑張っている。

慎重に粉砂糖振る神様もそんな面持ち初雪の街
熊本市 夏風かをる

【評】菓子屋の仕上げをするような感じで天から雪が降ってくる。豪雪と苦闘する方々には申し訳ないが、優雅な初雪の情景である。

福豆を細かく砕き雀らへ名のみの立春雪降り始む
奈良県 藤本 京子

相撲見て応援して曾祖父に推しのアニメを我慢する子ら
群馬県 金子 歩美

戯画なれど蛙が兎を投げとはす痛快さが好き老女の今も
宇都宮市 武藤さちこ

目いっぱい葉っぱひろげた朝はうれん草は花のやうだね
北九州市 白木 典子

嫌われし踏み切りを最後の電車過ぐ待望十年立
八王子市 武智 恩

うかうかと暮らしてはくびれなどヒトにはできぬジムへ通わむ
長野市 原田りえ子

枇杷の蜜さえずりながら吸う目白我は地蔵となりて見て居り
旭市 服部 恒子

俵 万智選

ようこびは扇のようにひらかれて帰省の我にかぶさる祖母よ
加古川市 石村 まい

【評】上の句の、めでたくも斬新な比喻が素晴らしい。孫の来訪を、とても喜んで喜んでいる祖母の姿が目につく。そのうえ、開かれた扇はバサッと覆いかぶさるのだ。

「明日やろう」はあしたの俺も思うから再来年ごろやることにした
大野城市 亀田 巧

【評】「明日やろうはバカヤロー」を下敷きにした一首。名言を逆手にとった開き直りが、面白い。

まだ一緒にいたい証として頼むロイホのオニオングラタンスープ
横浜 梅ぼしきさこ

【評】時間を延長し、店にいる言い訳のための注文だ。アツアツで、食べるのに時間のかかるサイドディッシュの選択は、大正解。

借りた本を返却ポストに落とす朝ミシェル・オバマの咳ばらい聞く
東京都 浅倉 修

ミモザミモザ身のほど知らずの恋ですか、ころ、こんなにならるゝミモザ 埼玉 玖嶋さくら

寶銭を立て替へし友の成功を神の視点で見れま
すように
東京都 富見井高志

ここからはアクアラインがよく見えて海から車
海へと車
市原市 井原 茂明

「持ってる」と言われた事はないけれど色とり
どりの悔いを持つてる
大阪市 原 拓

見るからにたくさんいたいてくれそう「一か
たたたたきけん」五歳の孫から
船橋市 藤本 典裕

このシャツがまたよそでであった頃森永さん
の講演聞いた
燕市 田巻由美子

黒瀬 珂瀾選

赤禪の漁師の支える仮波止を伝いて渡る和布刈
瀬宣どち
松江市 三方 元

【評】出雲市宇龍の和布刈神事でしょう。船に乗り込む神職と、寒中でも元気に裸となる男たちの姿を描いて、味わいがあります。古き習わしが息づく土地の姿です。

聖堂の言葉真直ぐに慈悲識らぬ者の上にこそ慈悲として降る
飯能市 四之宮光里

【評】トランプ米大統領就任の際の、ワシントン大聖堂のパディ主教の説教を思い出しました。「少数者への慈悲を」。その言葉に對して世界はいかにあるべきか、考えます。

立ち上る湯気と椿を蒸す匂ひ紙漉く家に吾は育ちぬ
西条市 山本美知子

【評】紙漉きの匂いととも育った、遠い記憶。「湯気」の描写に実感があります。少しずつ消えてゆく風景への哀惜を込めた一首。

三極の白き小さな蕾あり山路歩いて早春を知る
宝塚市 坪井 育世

モンベルのボトルに入れしほうじ茶を看護師経
由で君に届けむ
黒部市 新酒 律子

ぜんざいの残り集めて正月の賑わい仕舞うひと
りの夜
沼津市 京 理子

まわし叩く音高まれば盛り上がる父の遺影と初
場所を観る
京都市 千葉 典子

けぶりては雨水に暮るる街角の飲み屋のあかり
心まどぼす
霧島市 内村としお

亡き父のシェーバー頬に当てたれば生きあし時
の匂ひ残り
新潟県 冬木 陽介

雛飾り出せば涙は溢れ出づ逝きし娘の笑顔重なる
宝塚市 東耕 真

次回は11日(火)
掲載予定

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。
◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌(俳)
壇、〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンラインから 右の影絵はつるしびな